

小栗外傳
三

^ 13
3293
3



13
3293
3

寒燈話 小栗外傳 卷之三

東都 絳山歡醜 陳人戲編

藤代川 小栗良弼を以て

築波山 小風間明主を以て

第五編

且説小栗判官代助重へ君父の命あつて。米邑常陸國の賊谷村人と
道次急ひてわたりける。日あはばくと幸陸の國藤代川に到る。此川は
平原名高き大川なるに折しも秋の波雨あり。白波高く漲れ
幸急ふ舟とてまづ四方ふ人と遣て船を索をば。當村對の岩ふ
大勢をなす一渡舟あり。目今此方の岩とばして漕まぬべし。光景なれ
待てしとる。短ふ遠かき。あより一人の少年声。吹揚て船を呼け走せ
まじし。船の岩より二間むらも漕出たる。少年身と被し舟の裏ふ

大正十一年八月廿九日
本大學出版部 贈

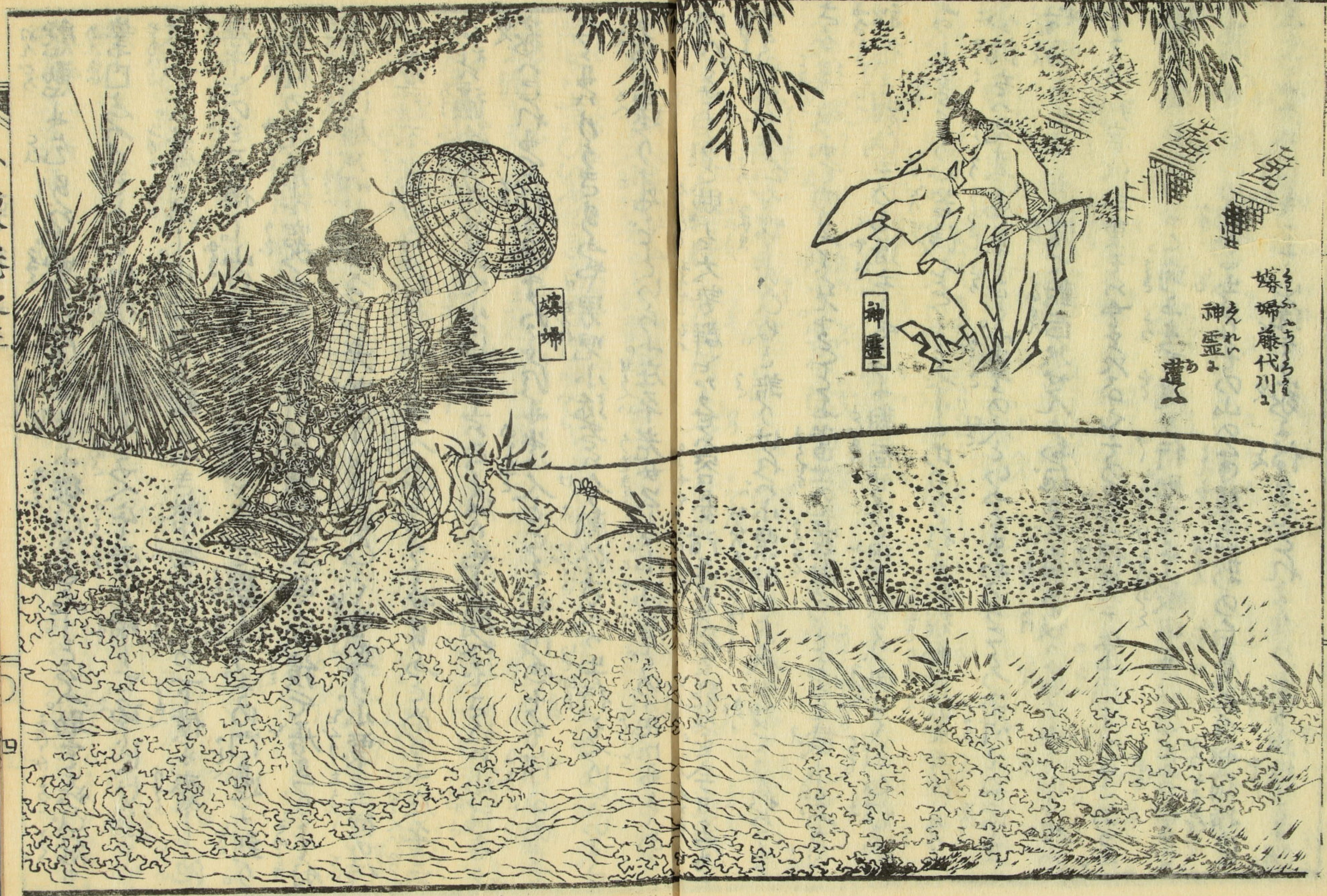
東都 卷之三

花をわたり侍を付六又右衛門のりあけける山伏の金剛杖も螺貝持く
 舟際も腰うちつけ居るり少年飛ぶ拍子も山伏が法衣の袖も服を
 の柄もかけてる山伏怒り腹をこら這小冠者りなる人なる斯れを
 一言の謝ともいふざらふ白痴おと罵れ少年の回意もせむ双
 眼も閉眼がごとくして居る山伏まましく怒り金剛杖もて撃んと
 その肘少年眼を瞋らし山伏次睨も驚き空をぬみ打て怖らさるる
 船中の人々も先づ山伏の怒りも今剛杖を捨てるもあはれは流
 らるる懼もて少年は着るりのほし船楫も押して捨て居れば船を
 流人とももそむきさるる漕で居る這方の者もあはれ少年は居
 陸も昂り何方ともおく急死するぬ小栗助も先刺よりの光をもち
 えて居るり少年の勇悍も孟貴も似たりさるる感嘆してさるる

今この世は勇者もあつるけりけりぬかやうのりの大臣とせむ君の
 大率の御用もまてくれさるるもして召抱入りのとと家の執務池乃
 庄平といふ近づく巴かあふあふと笑へ知らば彼が肩の上もまて
 めるも庄平といふ船楫も對ひ目今の少年のりさるるのぞく同らへ
 船楫をりさるる彼少年の此邑のりのめて名も少流とてさるるのり
 今年ましく十七才力あつて法も孝義あつるのりあてはるる彼が母も
 かりが一夜此後代川の夜をさるる神人を行遭り神人のり我今海
 家も行人ともさるる此地も遭ふこそ幸なりぬが胎肉も借して好まはるる
 りさるるも其教をさるるのりと思議のりも想ひぬまはるるた
 なるねえなり十三月あつて小流をさるる生りまはるる生りまはるる世のほへ
 をも取らぬ盛ふ山も捨る熊脊負ひて返るぬ又川も柱も瀾もさるる

これ唯くこの山とて終つて生きたるはひ力強く。成童の満
 ざらふ川よ入る漁捕。山入る木樵柴薪。尋常の人の之四人
 做業。た一人してなごりた色もは。此の山近比此邑。白狼の
 人との食ふ。又此川。悪しき水虎住く。人と弱し食ふ。其は人患ひ。此
 去来。この近國。群盜蜂起。此邑も賊のる。侵され。邑人あつた。お
 堪へ。財宝。運ひ他郷。後。賊難を避へ。池。水。小。赤。これを
 語。この近比。白狼と水虎と。群盜と。三の害ありて。此邑。群盜
 其。此邑。生れ。此土の。稻。梁。を食ふ。人となり。此。此。此。他。お
 さん。さん。力。の。か。ま。り。此。お。の。害。を。除。んと。さ。し。と。る。此。お。免。され。あ。ま。し
 此。お。母。喜。ひ。あ。く。も。さ。へ。の。の。多。と。免。る。は。ど。お。少。赤。を。先
 山。入。る。白。狼。を。斬。殺。し。次。川。入。る。水。虎。を。撃。手。殺。せ。り。ま。よ。り。盜。賊。を
 人。と。せ。し。と。賊。と。大。勢。群。を。た。せ。る。容。易。討。手。と。能。つ。と。今。日。と。も
 此。お。の。の。み。を。憐。れ。ひ。ぬ。と。語。り。け。ね。い。小。栗。助。を。これ。を。ま。て。な。が。さ。も
 さ。る。縁。故。ゆ。て。の。り。つ。と。え。さ。と。と。お。當。世。の。豪。傑。と。さ。る。感。も。さ。る。さ
 船。楫。を。對。ひ。その。少。赤。を。と。ら。し。對。面。せ。んと。想。ふ。な。り。海。を。討。ひ。お。ま
 さ。る。多。くの。心。苦。淺。を。さ。る。と。と。の。り。お。船。楫。を。お。て。ま。し。け。る。さ
 少。赤。を。え。さ。志。氣。も。く。富。貴。の。入。と。り。と。も。お。の。ご。と。ら。ふ。討。ひ。ぬ。志。氣
 對。面。と。と。と。と。強。て。對。面。せ。んと。お。ぼ。さ。る。自。ら。彼。う。家。は。入。あ。く。と。ら
 と。ら。判。官。代。助。重。そ。の。ま。と。ら。る。と。と。の。さ。る。お。處。を。守。り。し。て。ま。と。の。お
 ざ。ら。ふ。お。ま。と。ら。る。と。前。ま。て。進。行。助。手。を。殿。迎。せ。し。て。先。の。お
 と。西。下。の。山。の。麓。に。お。り。その。山。の。腰。は。一。軒。の。白。屋。あり。船。楫。指。さ。し
 ま。と。ら。ふ。の。白。屋。と。少。赤。を。家。は。は。り。し。これ。より。と。ら。る。と。と。往。し。て。人。

川野卷之三



塚

神

神
塚
代
川

小栗満宗の公達小次郎と申すはまことや庄平その小次郎君を援し
 多し判官代助重と名をよぶしめり老女の喜びさうさうあはれしつる
 あり豫て小次郎君の正なる文武の道よ長あひ徳倉一の少年なりと此
 願ひてもなへ男児小次郎とこれを慕ひしうかむせおのれは安らるあはれむ
 此君うとて主と称すべしと生平かや入はねけり今も還りぬらさるま
 喜びひひぬえんと雀躍して喜ぶ小栗主従密うまはれひあやめぬいの
 方お人のすやけいさあめぞ老女一間の外おま出さう忽ち声を高き
 し我子いふ還りの途より平日も慕ひまのじしる小栗小次郎君の
 くにほくさりのゆりぞと老女の心せじしてまかたはるまていふ小次郎を
 跪してやるる今日もひの外お耐を後し母入の心をもたけりぬはるの畏
 と述後目今宜くすと疑ふあめれ後小栗屋の成る達いそ我白屋

小栗のうらめしさと不審は老女いふなと仰りしりえ這裡よすりいふ
 に入とと誘ひ小次郎を一団の行く入も小栗助重の解を窺ふお眉はく
 眼秀て生骨相英雄の人と見えれば足らん小栗は相違あるはじと思ひ
 恭しく平伏してすはる僕則小次郎をよめななる貴人の何事ゆりて此
 茅屋おのらさるゆりゆりしとのべねが庄平近をよてアをねが我主前判官
 足下津はおあそこの解さうと見えひそ勇悍のほどや感しうん
 身もて因を結んと志するそもく我主助重こゝに母のまかていふ去平
 より東園のあし群盜蜂起し正民を悩ますとて大さうらうとぞぞ
 征し多しと惣大名お命せて其お領の賦を討しめり我主君もよ命に
 より采邑富園を氣の庄より下りめりあえまうはよ足下が勇猛の解
 えまひがる勇士と今の世も空く田野も埋とせん是赴も主君さうら

する。幣をとりて呈下をひくんとて頼る我主を助け多しとて
 助重も俱云我劉先主も似るるもの程と汝武侯の智勇をりて
 助けひまじ程とのりたれ小弥太母次顧くや多るの真加の命とゆる
 りのる僕様も君の英名を慕ひ仕へたる人と思ひあがり母とて
 べきものもなき奈何とも詮をさる。今日まで宿志を果さるといひ不圖
 君とて申さるるせもひんあか入るのころの喜能の身と抱入ると宜いと
 命が養ふこと人なれ幸母の速申は法を足より成るに従ひお
 らせんと思ひとせれと前も申さる。母とて申さる人なれと畏れと
 今のおぼと昔お従ひあはせむじ。かて時のくは伊家母すなり。大馬乃
 勞を助けとあはせんと恭敬のべり多し。そ付老女傍よりとてみ出さ
 登機の上と付と失ふへうに汝平日慕ひたる小次郎君のころら
 抱多りと宜いと申さるるを辞さるる。まて人の親たるもの。我子のうへ
 さるの福あるとたれは情とて雲井お昇るころとせとれ。ひて汝土民
 よりの上なる武士を登達浩福をうて候と想ひさるや母の羈め
 知らされて優曇華なる身の運の固く機会と過るべしと思ひのこ
 流るる。庄平とてみお斯母人も免あり何う子細のあはまざら
 さるやうにけれども我主君の幣物ごと金佗の太刀一はも其金一色と
 そ人小弥を前もさ。まけの小弥を親の初り人お君と親人判なる
 鳥きあはるはあはる。感塔の涙は深く思ひを謝し終り母も賜物
 ふゆれの老女の感涙せきの人とて合し一拜涙を拭きてさるる。な
 賤き土民を抱めあはるの真加なる鳥きあはるの賜りのれをばはる。な
 今日君のあはる。かて武士となりたるも。それの性をもばはる。老女が

家へ代く土民も其性何とらあをたふぶ。あられ此上の恩もたつるべし
 氏を後ひえんやとすゆも助重実通理なる。武士じて氏ななもいふべ
 なり幸ひこれる池庄平我家におめて累世の老儘なり。さうも
 形もいふれば今日より彼が猶子となる。其氏を侵す庄平の二事とて
 講の一字とてらと池の庄司助長と名をいへ一人いふとあひけぬ
 庄平とていふ山は母も助重が残るうかた命に伏し。このあひけぬ
 命とて感佩して喜びたり。付老女の厨のかうも退生しが忽ち継子
 土番お出君臣とてそのいふと盆と賜ふと父と賤家のくびらう
 たるぐじは器もいふとと此土番はたれこの濁驪と畏れぬ此土番
 男児も賜りあはしと助重が前も居すけが小栗とてなうたむいふも
 とうふのいふこの濁驪を駈る。君臣初對面の乳を授けたり。尚
 その序をもて庄平庄司と親子の義を待が因の盆をらせ主従親子
 四人がたむかひと此いふうのいふけり。此付庄司云はる今此邑は侵す
 盜賊も君の臣領を侵す盜賊もこれ一般の賊なり。某此邑人の為
 この賊を逐退んとする志をいふれど一人の力及び難まるといふ。其
 事をも思ふと君賊を退治するんといふが某もいふき謀のいふと
 助重の此国めとて下り土地の案内を知れ公憂れよとさすいふ
 庄司被を討の術のいふに大かたはるその奈何なる謀を詳らふ
 教よとあるもど。庄司膝をよめて這般の事にいふのいふ。さうも
 判官も庄平も限らう喜びさへ其謀を用いしと薦む。いふ
 さうこれ土卒を海上その配をばあは此池庄司の則足新田十人
 の殿糸の一靈再生とて過世の因縁とて判官代助とて君臣の我を

こゝに結ひる。この當國筑波山に兄弟の強盗あり。兄は風間次郎
 正貞といひ弟は風間八郎正國といふ。年僅廿七と十六なり。習勇
 わる。そのありをれやどに終に盜賊の大將軍となり。手下多し。その常陸
 の國の盜賊はこれよりこれより知れ従ひ多し。然るに筑波山の東なる麓に
 横川といふあり。此流との末の名中めふ。その川の川を隔るる岩に
 一軒の旅亭あり。これに風間兄弟の手下の賊もて鹿六といふ者。此所を
 旅亭をのりけ。旅人をやどり財宝多く持する。旅客のれば密に小舟を
 走らし筑波山に告知し。風間を呼びて。財宝を奪ふ。と云ふ。されどその
 事常共せと。只福者の宿りし。これの事。其の家盗人か。事を知る。考は
 庄司の少侍と云ふ。討より賊を討んと想ふ。其の公に用ひ賊の密謀を
 捜り。鹿六が密る。と知る。主君小栗め。馬よ。其鞍をたひ。と云ふ。

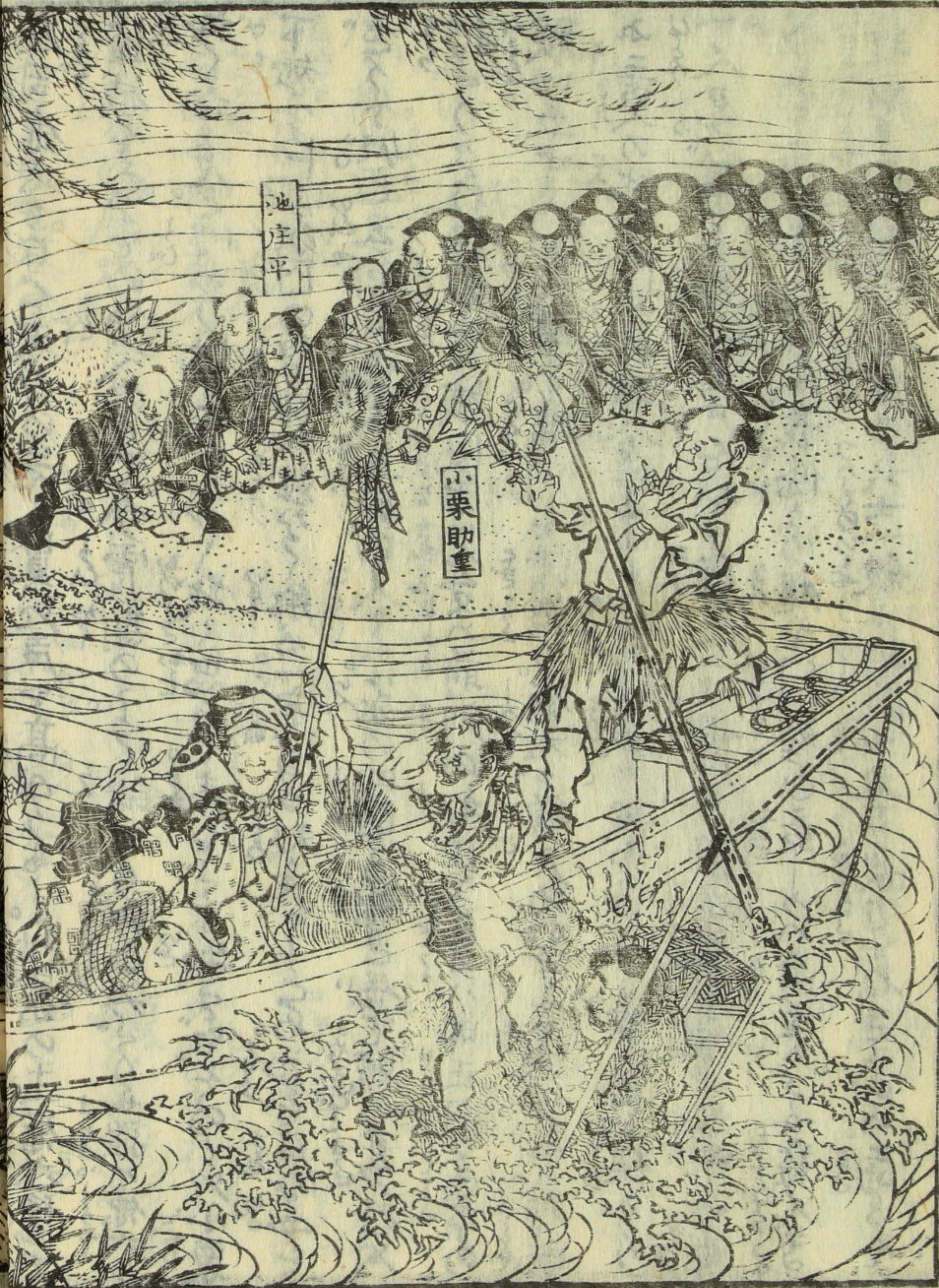
牽せ。多くは長櫃に押寄。ははしく。武具金銀を入。其神を。をひ。
 今回鎌倉殿の命により。小栗判官代助重采邑多氣の城に。を
 して披露。士卒を。埋伏は。侍下僕僅廿二十人。の。引俱し。
 彼鹿六が家。宿りけり。鹿六は。小栗が。光景を。窺ふ。限り。は。福者。と云て
 けり。多し。風間兄弟。が。知る。一人の小賊。舟。筒。を。お。筑波山
 の山塞。小。越。じ。り。小賊。鹿六。が。命。と。票。小舟。を。り。奪。り。横川。を。西。よ。けて
 漕行。外。豫。て。小栗。の。謀。め。より。此。川。の。岸。の。繁。々。と。小。船。を。居。る。他。の。庄。平
 の。舟。を。ん。て。忽。ち。頭。れ。出。彼。小賊。が。奪。る。舟。は。奪。り。の。もの。も。云。は。賊。を
 投。へ。く。締。殺。す。其。夜。服。を。剥。と。り。これ。を。奪。り。入。腰。に。せ。書。簡。を。奪。ひ。其
 舟。を。奪。り。徑。に。筑波山。の。山塞。に。到。り。鹿六。が。奪。る。風。を。只。身。を。呈。入。る。事。を
 兄弟。破。き。聞。て。か。き。り。お。く。喜。び。庄。平。と。鹿六。が。下。僕。と。あり。し。尚。ほ。光。景。を

同の庄平回意をば小栗の尋ねのめりて人々をば驚かしては
 その酔は時を定めて相圖をばすべし。大なる夜まはるるに
 倣かじ。その時をば定めしむるにや。あはれ申すに
 宿備をせよと。下の小賊を侍候するに庄平をば
 某は先まゝの麻六と示し合をせよと。別はけり。
 小舟に乗りておぼろに漕房をえの音聞し懸るひつ相圖の針は
 居ぬ且説這行へ小栗判官代助重池庄司と謀を議し旅宿の主麻六を
 呼まじ酒宴をなして居りしが既酔ありと。あはれ申すに小栗助重庄司
 あ目配をばつゝをばひくも躍り出腰の刀ぬぐくも雷光石火の
 光とも麻六の首と前母を流るる。取らるる女は此光景
 を見るも。あはれ申すに慌忙に家内の男女をば見せしむるに
 庄司麻六の首を大刀の先母貫つて声高く申す。此家の主麻六は
 盗賊をよその人へつて今宵斯のごとく誅せり。汝もみづり申す。麻六が
 如くあはれ申す。けり。あはれ申す。声高く申す。小栗
 下知は家内の男女はけり。一室の処におもひ必し声を出し
 ぞろぞろと云合は小栗主従の人々へ家の四面を廻りて賊の
 付るるに筑波山の城風をば受へ前刺の如し。お八郎正国は下の
 賊四五十人。堀川を漕渡り麻六の脊をのからむ。時既
 ぬ三更の比。しるし。時分なりと。あはれ申す。音のふり
 一人忍びかち申す。声をおもひ。お八郎正国は下知をば
 へり。あはれ申す。入らば幾條の繩をば纏ひ。盗人
 跌倒し。臥転ぐ。小栗の兵士一般は。取れ申す。大刀長刀をば

小孫太
孟貴
勇と做
終験者
驚毛



小孫太
池庄司



池庄平

小栗助重

新巻之三



さつらぬ斬やどち一盞茶付廿四五人枕をうつる死失る風間八郎此
 光景をみるより。この旅客不欺とてつりと悟たれば此御斬入るも詮
 なく早く山寨を立還り。兄正貞と謀を定め此恨を報ふと忽ち身次
 替へし。所を立還り。徳川の邊にま至り取寄をすまひし舟をみんせ
 ざるふ其舟四五艘ありしが一艘だけせん。こらうせんと思ふところふ
 後脊より小栗が多勢追まらふ今何とも詮をえを志くは呆然する
 折らぬ若向をふれが一艘の小舟あり。是さいつらんと其舟小とるを自
 棹さして中流まで漕出たれや。どひもかけも舟板の下より一人の漢子
 躍り出八郎が鉄膝をかひなされば。はじりの八郎不意を撃まてかんと
 射る。又三四人の漢子舟低より駆ま出押へて繩をもをりけり。今舟低
 より知るる。是流とらぬ舟則ち池庄平と甲夜は山城を質て筑波山の
 山寨に到り風間八郎と助重を助き八郎をこへおひきば。舟よりのぬりたれを
 窺ひその舟をふ残りたぐ。芦間舟陰におのれが舟を寄近く繫ぎたむき
 士率四五人と共舟低舟陰れ八郎がまゐると待て急舟起て生捕し。斯て
 庄平八郎をま率て判官代助重がまお出生捕し。奔らんとせえ。助重
 庄平の切を賞し。さて八郎が郷をへ自ら解きゆるてまへのまの骨相
 を着るふ天晴當世の豪傑あり。惜る其器量ありてなごや梁上の君子
 とらるし。そ凡人生れながら盗をあるものば。渾足長家の子まなる。次才
 の放湯よりあつた方なく。録林の群舟入るをば。海もさぞありつゝ。早く
 先非と悔素の良民あるこそ。賢し。再ありとらん。我儀倉い。又
 せへのげ。然るべき衣食の地をふへん。と懇懃ふ説示たれば。八郎を
 助重が忠告なれ。流を感し。君の正教まこと。心根は徹し。いと忝く。そ

存じぬ速しき回悪とす。再び山へ還らばとありひけれど兄あは次郎
 ちも君の仁徳を志すじ。此示教のほどは悦諭し其志氣を改めはして
 陣中を俱一悉らんとはは顔くは皆討の此眼をまらり。山は還らじ
 ろるが此上の恩恵ありとありけしお助重完示とに汝のひかき入てま
 討らひいと。その望まほし放ちて山へ還らじけり。庄平庄司の是とて
 謙々は彼軍へ恩を我を知らざるものこ。いそ君の教お伏しやせん必を
 こに其のしきもあるとも偽の謀をなす付進し賊亦が仇を報ぐんを
 ぞとやけお助重うち。ふし我をよの知まら。今彼を殺まを易いと
 りと盜賊彼ホのこもあは尚多し。悉く誅せんを我の兵もさこ
 換ねべ。徳をりて伏すとて四方の賊自ら帰化とす。八郎の伏をもも兄
 の次郎憤り汝懐て再びこもよとてきみ。今回も顔くは生捕もとてとを
 宿備とせかりしけり。

孝子耕田して孝義を表す
 勇夫山獵して邪惡を除く

第六編

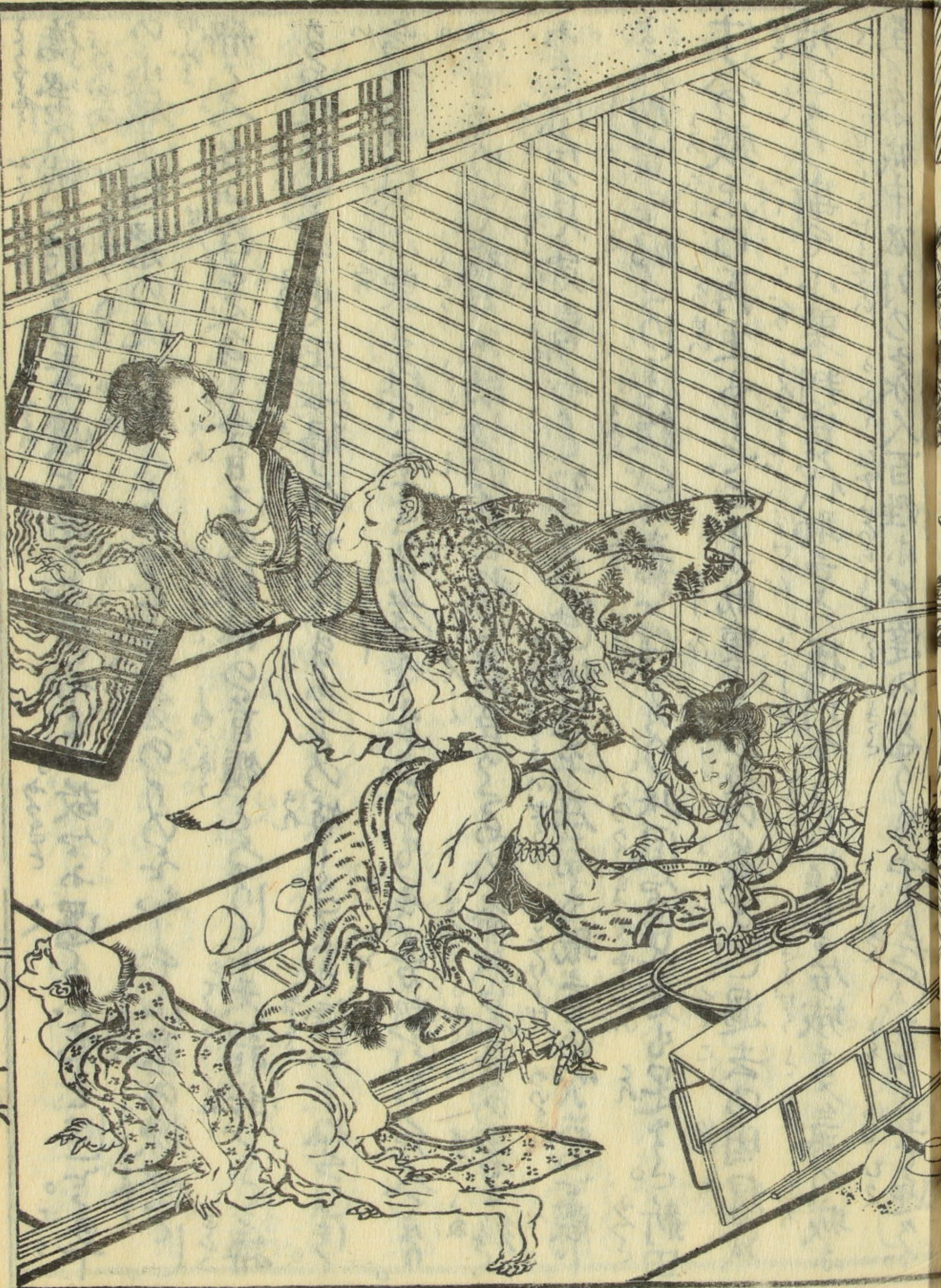
風間公郎正國ハ山塞ヲ逃遷リ。兄次郎ハ小栗ヲ許さくことせしめられ次郎
 大に怒り我手下の者ハ渾我と我を寄らるりのこ。其のどのものヨク
 討らるるをそのまに知を教せん。丈夫の所為るるハ登小栗の鬼神
 ちもわれ此仇を報ぐをやとて。戦は下下の賊を催し小栗を夜討せしと
 既よを配と定めり。然れども小栗が光景を知りて悪くうんと小賊
 を多くとはかきと。忽ち走ゆりて。小栗の今宵公郎の次郎を
 けひるふとて。彼を旅奔せし居りと報ぐ。次郎は喜びし。うし押
 ちも討られとて。下下下の賊数百人と將て山を下り。弟と後の方よりあはし。

おのれの表の方より責入るべしと其勢を二つあふ。小栗が旅宿よまるとりけり。時、正、初夜の比及なり。表と後とお宿を定め時、大開きし。旅宿の裡の寂して音もひ。次郎不安ぬ心よ下知して門戸をうち毀し走せんとす。さらば人殺ぶらむと。驕られぬと俄も手勢を引揚んと。さると後、背の山陰より周次似りて走せり。のあり。是則小栗判官助をばり。各きふけつ討てかれ。次郎小栗とせよ。葦切怒りを形に。太刀も向も挿し馬を飛ばせ走せ。小栗完承とら。笑ひ。中。盗人のあふ。ひろねと長刀を閃く。迎之。既よ二子解合よ及ひ。次郎力勞れ今勝べうとも。さると刀をむいて走ると。又軍馬生きて行先を遮ると。是則池の庄司助長と次郎これと。お宿の河をせんと踏踏と。庄司御と走ると。組の次郎お宿と。

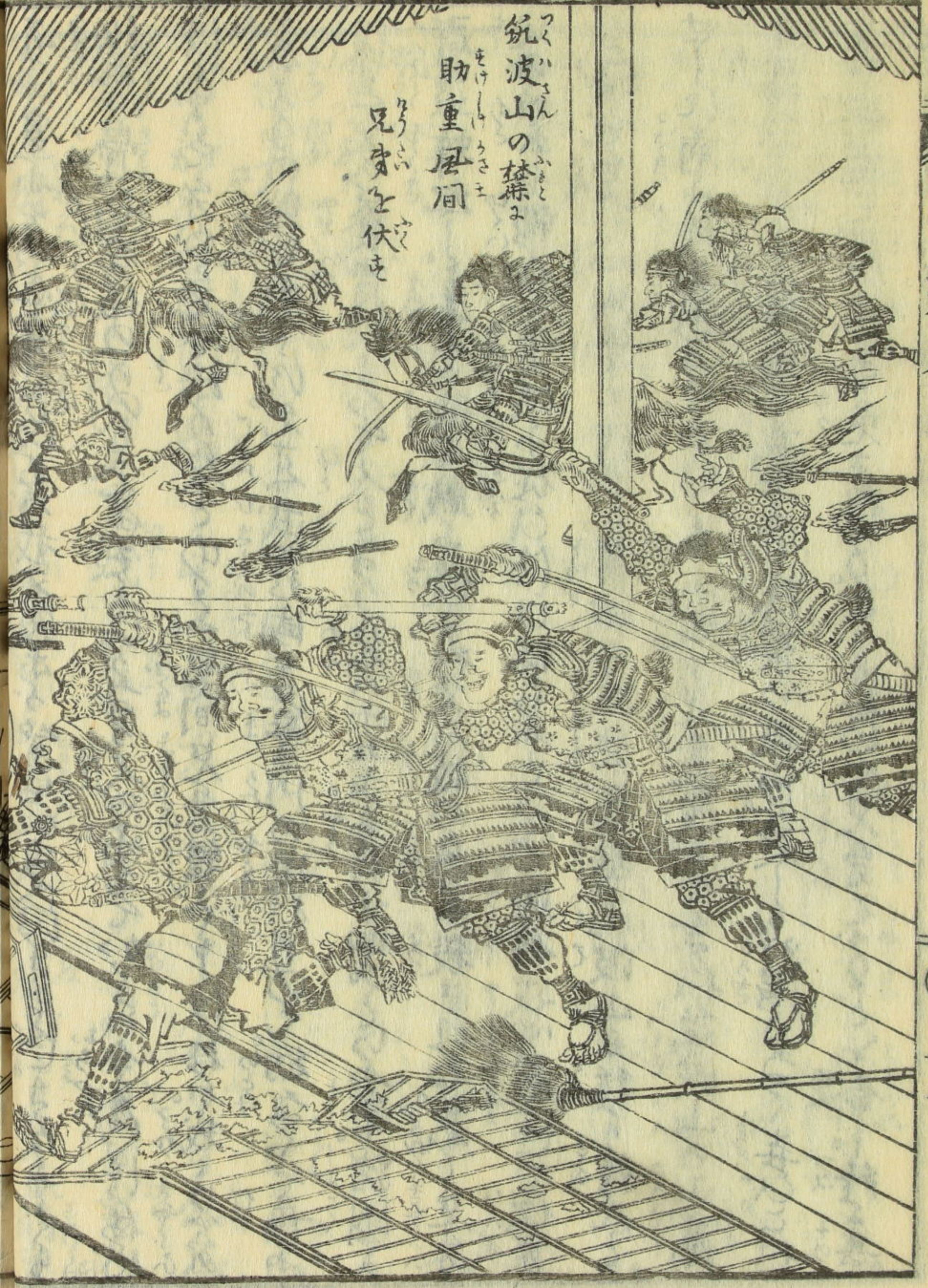
つりと操合しが。中がて馬を回お控と落る。庄司カやほさうりけん。次郎と組敷。此所敷多の士卒あり。重て次郎を高く山もお郷あり。さて又八郎後の方より責入り。一人影なれお宿の謀中りぬと急おおんとし。お宿もかきぬ後の方より池庄平百餘人の兵を卒し。関を揚て責か。八郎再びお宿に返り合と。戦へとも。乱れ。城兵とも。い。止むと。耳やもせ。いれを散る。お宿散る。八郎た。一猪庄平と。兵ども四方を圍と。逃と。は。責と。八郎勇と。一方を斬り。表の方へをり。小栗助重。間なく行遣と。八郎これと。馬を。走る。效を助を声け。約を背れ。信を失ふ。賊早く。御を受る。汝が兄。次郎ハ。や。前刺。お生捕て。我陣ありと。お宿。八郎これと。今。お宿と。自害せんと。お宿。大勢の兵あり。重と。お宿。

小栗ハ勝岡公揚兵衛をまゝとあり本陣也還る風間又守を拘執となりて
 小栗が前由牽居られり其前判官代助重兄弟の郷を解免し
 外生捕らる小賊亦もゆい皆酒食をよみて懇心せ食毒し其後風間
 兄弟が對ひ我昨日八郎を擒せしれよく教訓して還し
 今夜もりて能くをりこれ何のふぢや汝もいふ事とも天罰い
 逃入るをわすれ正民も帰ると賢れ八郎がいふごとく衣
 食の地をわすれしとありなほ風間兄弟涙を流し我く鈍て人なる
 道と失ひが悪行しつと悪くとも悔きを再び免て蒙る而已
 うのりがこれ教訓を賜ふこと生恩思ひん忘れん今日より必
 改め君の臣となつていさる賤き業もし九牛が一毛の恩に報ひ
 せん然るに此事叶しあひらんやと生恩思ひんて泣きけり
 森ハ実小その志を改め我又汝が望をか入るべきとさる母も
 汝が骨柄忠信のものとすももいさる人の子をかくる今後は
 はくまを身のうを結りぬとあり風間兄弟謹んでけり我く兄弟
 素よりの賊よあり元武義國多摩郡の辺けり初めて母
 後父の養育にふて人とあり兄ハ十五才の十四才といふ年諸國
 群盜蜂起し未だ御も賊も侵され父ハ賊のめ殺されぬ幸く兄弟
 父の能を頼んとて城も從ひはけ移らるとあり賊將我心嚴じて便宜
 を好むと多し心は早しはるる其城の棟梁南國流波山も移り信人と
 せし前も強盜ありてこれと争ふ我く兄弟夜もぎれ流波山の山寨
 小忍び入りの強盜の首とあり棟梁の賊も入る限りなく森ハこれ
 よの側近く居ると免されりいふあはれ兄弟もいふごとく命終る其

森ハ實小その志を改め我又汝が望をか入るべきとさる母も
 汝が骨柄忠信のものとすももいさる人の子をかくる今後は
 はくまを身のうを結りぬとあり風間兄弟謹んでけり我く兄弟
 素よりの賊よあり元武義國多摩郡の辺けり初めて母
 後父の養育にふて人とあり兄ハ十五才の十四才といふ年諸國
 群盜蜂起し未だ御も賊も侵され父ハ賊のめ殺されぬ幸く兄弟
 父の能を頼んとて城も從ひはけ移らるとあり賊將我心嚴じて便宜
 を好むと多し心は早しはるる其城の棟梁南國流波山も移り信人と
 せし前も強盜ありてこれと争ふ我く兄弟夜もぎれ流波山の山寨
 小忍び入りの強盜の首とあり棟梁の賊も入る限りなく森ハこれ
 よの側近く居ると免されりいふあはれ兄弟もいふごとく命終る其



筑波山の禁裏
 助重風間
 兄弟を伏せ

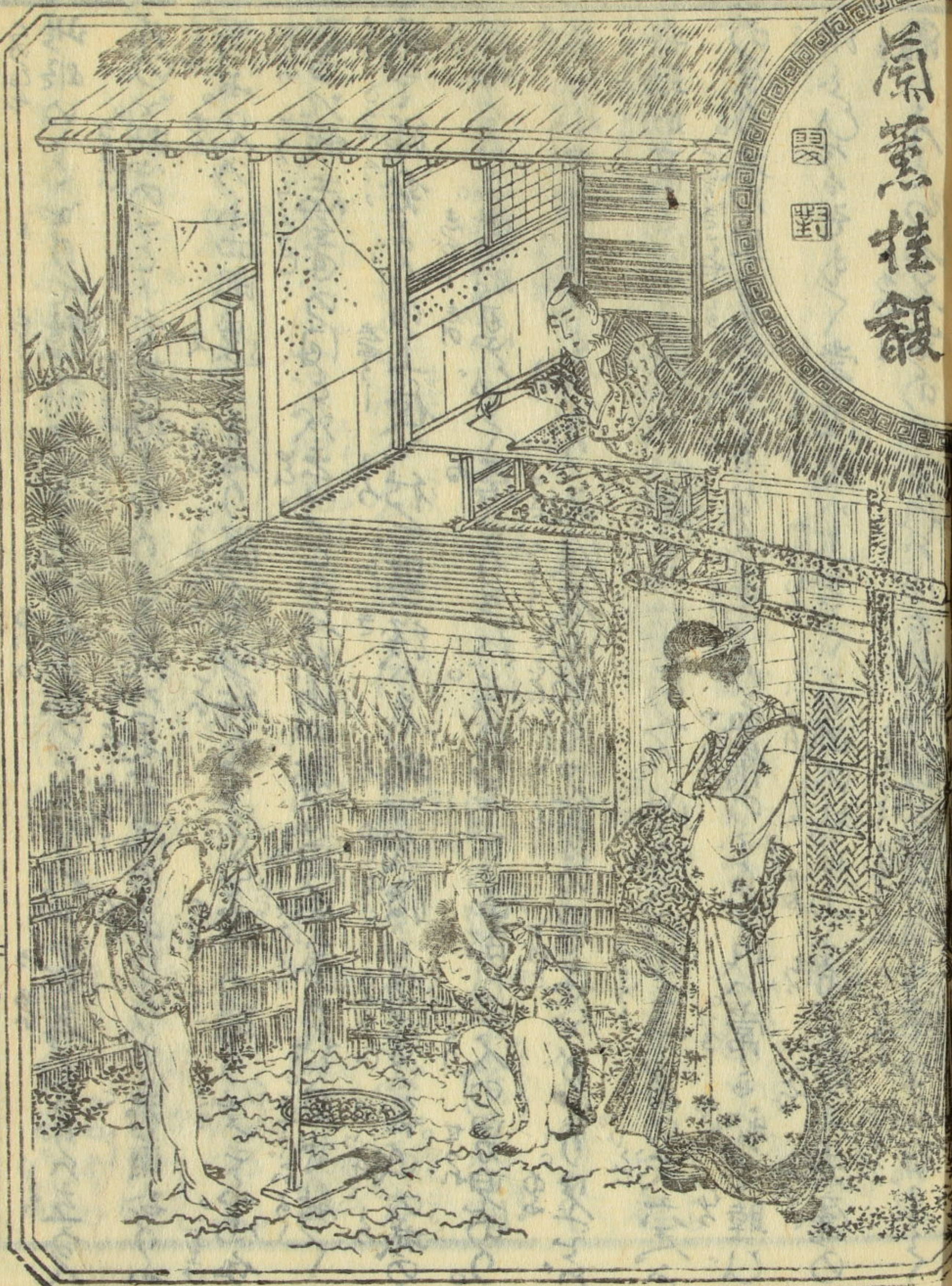


栲梁の賊と討ち。素懐と遂をばしやぶ故々還らざるをせしめ下
 の小成亦栲梁の仇と報んとせせと。足守のいのをわけて山塞の棟梁とし
 冊とてはふ詮とせり。今日まで緑林の首領とありしと天翁我くと併
 りの君とて正し帰化せしめり。あつての妹とてよと涙おしぬぐひけ
 るるのされば小栗さねがこそさる孝子とてあつても義勇難ひかた人なり
 今日よりして我力に助けおほしねと君臣とあつての孟浪足守の者も終つ
 ちも風分足守喜あつてかぎりの池庄平庄司も助守の明察と感
 した朋輩をほつりしと飲びの宴と催しり。此風分足守も足守と新田
 十人の殿系の再生もしてこそ助守と君臣の義とほ過去の因縁は
 結ひり。斯く小栗判官代助守と横川をうちたらし居城多々氣の城は
 至る小城中城外の家人百姓も公達のまのあつて喜びをきくして迎る。
 判官代ハ城に入らば人心を飲がさんと。府庫もある処の今浪系後と知し
 貧乏ののちろせり。おやどに土地をひ老少徳を賞し。公達り日本國の
 君とて仁徳処まの帝もあつて劣りしと喜びあつて涙のはしめて
 又近國の強盗亦助守のまの風間足守と知つて思ひのりのをきく
 逃く跡をかじ仁徳と慕ふのの降参と素の正民も帰化せり。富國
 の中ハ盗賊絶てなく。夜とてたさぬやぶあぬやぶ。形のければ四民
 を業とせり。國自ら富て民の竈も賑ひね小栗の此のゆりのゆふ
 公樂とて。いざらば其光景をえやと。孝行と称し城外をわけて農家の
 体たたくを窺ふ荒らる田もなく。増進し家もる之は公理かき喜
 る。四方は徘徊し。二月のことなれば春のあつ小田とてかかさんと農
 民も田野をわけて耕し。いざらば足守とあつた農夫とあつて。畔を午饒の

食具らしひくれ喰め居るあり。身とおが、たのめ喰むじて只よはるこ
 客人の待遇ぐじし小栗達の岳よりこれと望着てあく賞敷。賤ま
 身あてき人も及ぶれをささるの不思議さよゆまぬうあつんとさ者
 と傍おけりなは村長お對ひ彼亦何うありのあて名をいぬとせり。向
 られが村長遣でせう。彼れ兄弟ののあて又加次郎とらひけり。加次郎
 とやゆ彼が奴が加平とせり。文流ことよき近辺ある二ヶ元購物あて。
 賢い人と教ひいぬ。四十三とよ子さるや。お神も佛も祈こと。二人の子を
 まらけさあつひつがう。教導すて艱育せり。ね彼ホいごとゆらた時
 隣家あて餅を春なほを。兄弟の子供これををて家へ帰る。隣家あ
 餅さん春の何のあも付るもやと。生母は同や。お母哉とせり。お母も吃
 せんぬぞりしとあつ。加平これとせ。妻と戒めて云凡子と経て。席の正
 なは居るに割正なれ。飲食ごととさ。いふなれ。兄弟漸りの心をわす
 らるふいを欺れ多ひはるごとと云。懲し。餅賞で二人の子も吃し。又或時
 兄弟にて。塙の壞と修理まよ。地と堀ると。数尺あし。教す。又文の
 錢のり。加平が家素より寒家なり。兄弟喜ひ。父母も喜る。加平
 守ておが。じてさく。り。其道と勤め。じて緑とけり。さ。お尚禍の根
 りのとして。賢人といと。危あり。まひて。お救る。て。賤とほ。六。足。亡。る。の
 本より。我お。い。て。い。を。足。と。取。扱。ん。や。り。と。終。お。せ。埃。と。埋。ま。し。た。り。か。ど。ろ。の
 厳ま。教育は。る。や。お。兄。弟。も。父。の。教。を。守。り。些。も。曲。る。心。は。し。その。上
 文道ふ。長。と。る。ね。終。る。ふ。去。年。父。母。没。命。な。れ。お。兄。弟。悲。心。を。堪。う。り。お
 食。ぬ。て。五。日。形。悴。疲。り。小。祥。お。及。び。て。も。心。の。愁。は。忘。れ。ぬ。墓。の。傍。に
 席。を。結。て。三。年。よ。て。居。る。ね。後。家。を。還。り。生。業。と。勵。ま。兄。弟。同。居。て

食具らしひくれ喰め居るあり。身とおが、たのめ喰むじて只よはるこ
 客人の待遇ぐじし小栗達の岳よりこれと望着てあく賞敷。賤ま
 身あてき人も及ぶれをささるの不思議さよゆまぬうあつんとさ者
 と傍おけりなは村長お對ひ彼亦何うありのあて名をいぬとせり。向
 られが村長遣でせう。彼れ兄弟ののあて又加次郎とらひけり。加次郎
 とやゆ彼が奴が加平とせり。文流ことよき近辺ある二ヶ元購物あて。
 賢い人と教ひいぬ。四十三とよ子さるや。お神も佛も祈こと。二人の子を
 まらけさあつひつがう。教導すて艱育せり。ね彼ホいごとゆらた時
 隣家あて餅を春なほを。兄弟の子供これををて家へ帰る。隣家あ
 餅さん春の何のあも付るもやと。生母は同や。お母哉とせり。お母も吃
 せんぬぞりしとあつ。加平これとせ。妻と戒めて云凡子と経て。席の正
 なは居るに割正なれ。飲食ごととさ。いふなれ。兄弟漸りの心をわす
 らるふいを欺れ多ひはるごとと云。懲し。餅賞で二人の子も吃し。又或時
 兄弟にて。塙の壞と修理まよ。地と堀ると。数尺あし。教す。又文の
 錢のり。加平が家素より寒家なり。兄弟喜ひ。父母も喜る。加平
 守ておが。じてさく。り。其道と勤め。じて緑とけり。さ。お尚禍の根
 りのとして。賢人といと。危あり。まひて。お救る。て。賤とほ。六。足。亡。る。の
 本より。我お。い。て。い。を。足。と。取。扱。ん。や。り。と。終。お。せ。埃。と。埋。ま。し。た。り。か。ど。ろ。の
 厳ま。教育は。る。や。お。兄。弟。も。父。の。教。を。守。り。些。も。曲。る。心。は。し。その。上
 文道ふ。長。と。る。ね。終。る。ふ。去。年。父。母。没。命。な。れ。お。兄。弟。悲。心。を。堪。う。り。お
 食。ぬ。て。五。日。形。悴。疲。り。小。祥。お。及。び。て。も。心。の。愁。は。忘。れ。ぬ。墓。の。傍。に
 席。を。結。て。三。年。よ。て。居。る。ね。後。家。を。還。り。生。業。と。勵。ま。兄。弟。同。居。て

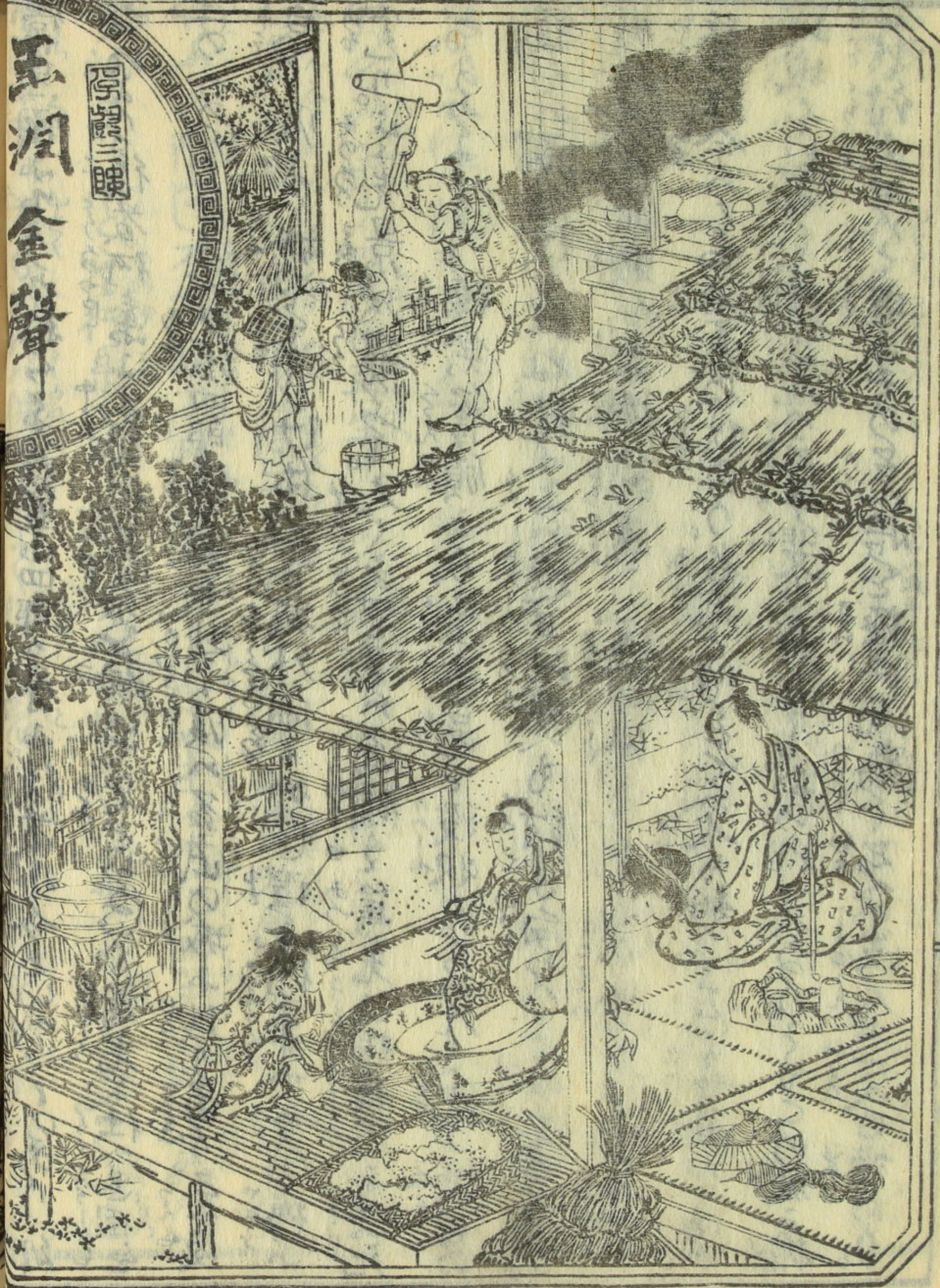
積錢を
袴
鄭氏の
戒を
思ふ



玉潤金聲
扇薫桂靨

三
對

妻と
五母の
教ふ
思ふ



此娘のこととて愁訴せむささぐ名家のことなれば家名をうらまへ
めのと愁のこゝと其妨となりさらんは不忠のそめなりと鬼角あり
所お兄の小田郎還りまの徳倉の袴たたくと詳お語りせむお小ゆ
致るれ我志家のほご云々おれが小田郎もは志氣あれば兄お社く
識る徳倉よりの上使と行く異議なく城を明けし。兄弟の名武の城の
片やうりお暫時おひびく居るうらねごに養登小田郎一人の男児あり
名を小太郎為久と名けり又後友小助も兄の男子とりてり。兄は
兵助助高といひすと大八郎高次とりてり。此之の少年才の文六ふ
のまり大八早業の勇者なり。まより血属のことなれば常お親く睦ひ
結ぶひるそもく常陸國の山々く武の城も山は近く既お玉属の
龍かんどりの名あり。まは小太郎も後友兄も平生山嶺しとく

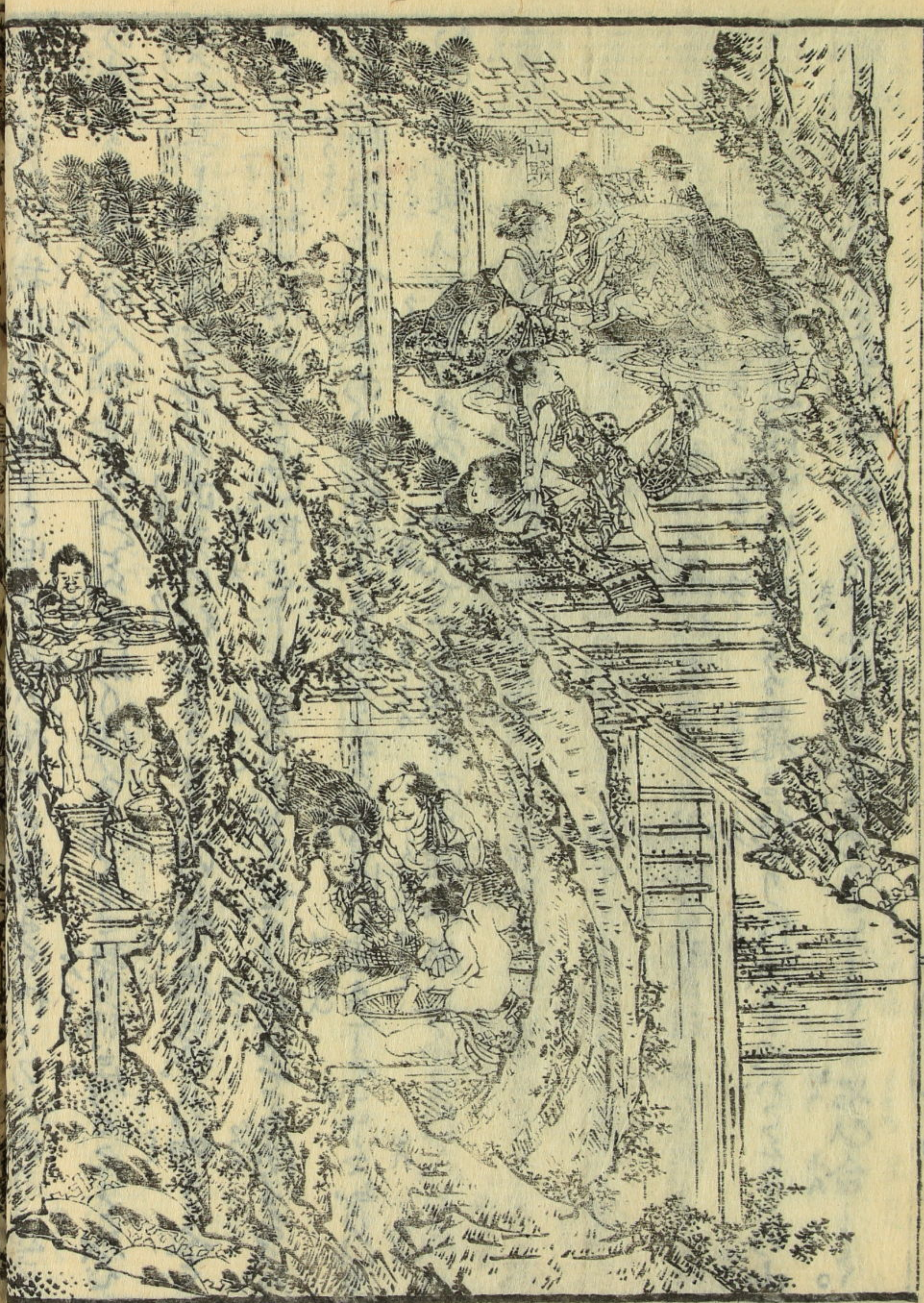
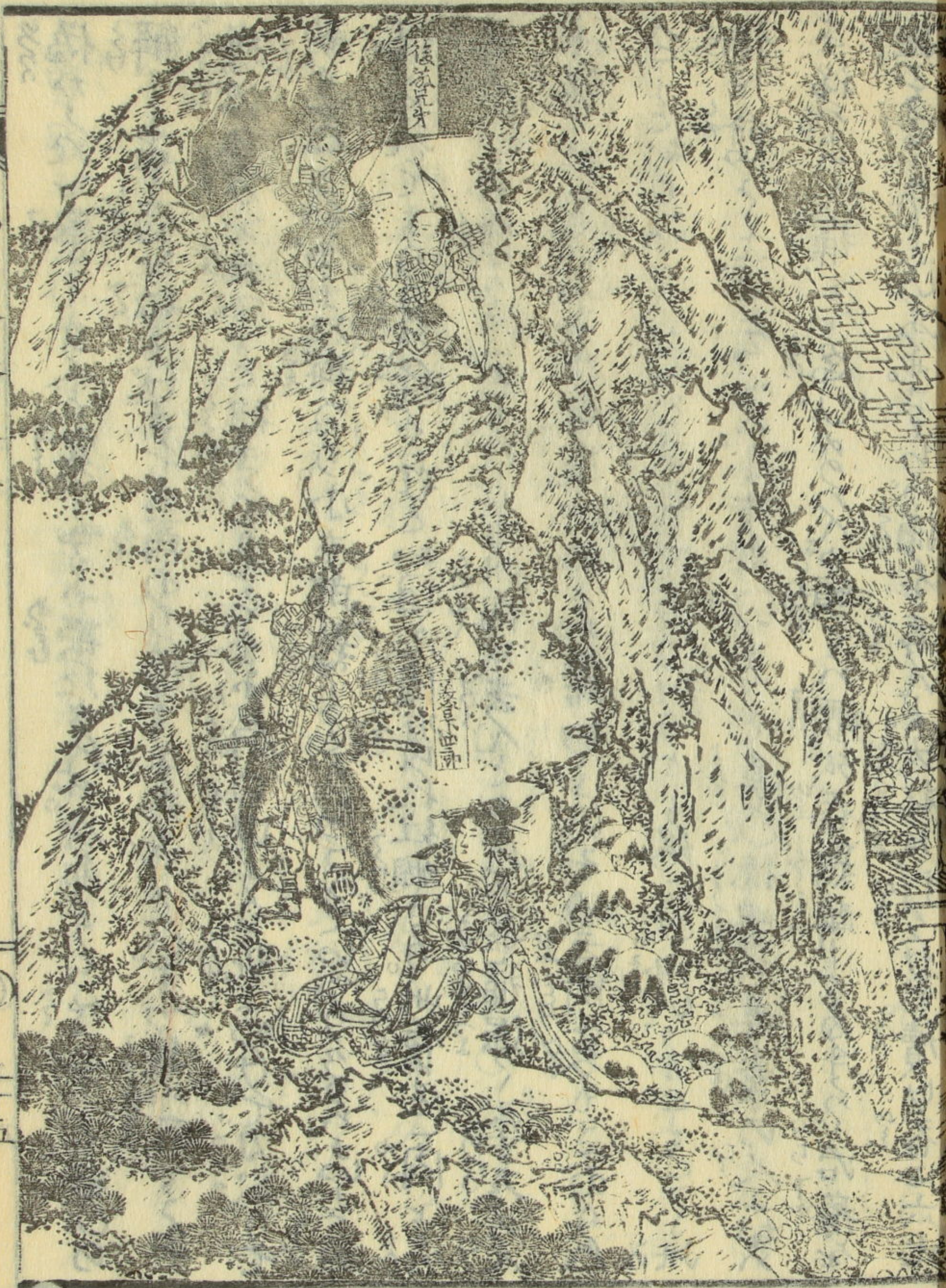
樂しことせり。一日のつものごとく。三人うち連玉属の麓の下とる山は、つれ
のち。終日待つじは、つれ何の獲物もあらず。公樂まをじて既お
家路も還らんとする時、つれ小太郎後友兄をえ失ひ一人麓お
からんとするお忽ちる失て穴行お墮り。この口惜と知んとせれど穴裡
闇しと知れた方と知る後、暫時お居るしが、漸やくおそのの咽々、
えある方あり。さておあより出る道ありと、まはまはして進みお幸て公剛
の下の物あり。これにおひて少く公安堵と何方か麓あるを弁とて、四方
を徘徊て道を索まふ。一つの細流あり。これよれおのをえ居るののうお此おの
流る方こそ麓あると岩辺お近付えらふ。いと清くうなる流るふ。
えらがるち俄お朱を濯くは、いと赤れ水流れまれば、この不審と流
の方とうちえ中らふ。怪ひる清く發中らふは、小女の血お染これ夜を濯

居る。小栗郎これを見て大まき小怪し。鳥も通ぬ山をこころふ小女
 の居る心とねね平く山鬼の類めて我を騙うとあがえり。いで手
 捕りしをねんづと小女が側近あり。小女よりかゝりて小栗郎と見知りひ
 とおひし。走まるとまはれ。小栗郎踏かゝりて引倒し。足下は踏へ
 声とあらげ。汝いゝる。妖物ぞ明白。おひし。はは。苦惱る。のの。おひし。
 撃殺せんと。とわりの。妖物。小女へ我く。惚れ。し。回。あ。て。あり。う。れ。が。
 漸。あ。り。て。お。と。ろ。く。い。り。ち。た。た。奴。家。さ。さ。く。妖。物。さ。ら。に。尚。困。ま。ま。乃
 庄。の。り。の。なる。う。今。ま。麻。呂。指。と。と。て。途。中。で。盗。賊。に。出。遭。ひ。此。山。は。誘。引
 身。は。る。者。あり。と。つ。ち。お。小。栗。郎。豫。て。此。山。に。強。盗。は。る。は。し。と。お。ひ。さ。さ。て。も
 さ。る。こ。と。よ。り。は。る。よ。と。便。か。れ。と。お。ひ。し。お。ひ。起。し。て。塵。う。ち。ま。ひ。し。と。
 山塞の光景と結ぐ。下と。同。か。く。も。は。小。女。の。山。の。強。盗。と。流。間。次。郎。と。そ
 素。へ。流。間。の。盗。賊。さ。り。が。便。宜。の。う。ち。近。に。此。山。に。接。近。は。手。下。の。少。藏。も
 三十人。む。ろ。も。ゆ。ん。次。郎。の。財。宝。を。奪。取。ふ。の。と。な。る。に。容。き。飛。した。女子。を。も
 奪。取。ひ。お。の。れ。が。ゆ。ん。秘。ひ。と。ま。ま。と。し。ま。つ。ま。さ。る。と。京。海。金。を。賣。こ。し。に。ね
 それ。を。も。こ。ま。も。辞。め。る。と。斬。殺。し。な。り。既。に。今日。も。一。人。の。女子。を。斬。り
 小。袖。を。お。洗。い。し。と。ま。ま。も。ん。身。の。事。り。も。ん。所。方。も。り。山。塞。は。美。妻。の。こ。と
 あ。ら。ぶ。逃。れ。お。ん。ね。け。道。の。困。る。と。次。郎。は。身。の。こ。と。より。身。の。ま。ま。を。あ。ら。は。は。い
 失。ひ。さ。か。ら。ま。ま。き。ま。と。く。と。ま。り。多。爾。は。あ。れ。と。彼。困。道。の。穴。に。み。ご。り。お
 出入。と。難。し。と。ま。ま。足。より。南。の。方。に。常。く。出入。する。所。あり。こ。と。より。逃。れ。出
 多。入。奴。家。道。志。る。と。ま。ま。せ。ん。と。い。へ。小。太。郎。い。ま。ら。の。案。内。さ。へ。汝。を。も
 ば。え。ん。と。い。ふ。小。女。や。ま。ま。の。志。の。喜。し。と。れ。と。次。郎。去。日。の。病。を。負。て。こ。の

山塞の光景と結ぐ。下と。同。か。く。も。は。小。女。の。山。の。強。盗。と。流。間。次。郎。と。そ
 素。へ。流。間。の。盗。賊。さ。り。が。便。宜。の。う。ち。近。に。此。山。に。接。近。は。手。下。の。少。藏。も
 三十人。む。ろ。も。ゆ。ん。次。郎。の。財。宝。を。奪。取。ふ。の。と。な。る。に。容。き。飛。した。女子。を。も
 奪。取。ひ。お。の。れ。が。ゆ。ん。秘。ひ。と。ま。ま。と。し。ま。つ。ま。さ。る。と。京。海。金。を。賣。こ。し。に。ね
 それ。を。も。こ。ま。も。辞。め。る。と。斬。殺。し。な。り。既。に。今日。も。一。人。の。女子。を。斬。り
 小。袖。を。お。洗。い。し。と。ま。ま。も。ん。身。の。事。り。も。ん。所。方。も。り。山。塞。は。美。妻。の。こ。と
 あ。ら。ぶ。逃。れ。お。ん。ね。け。道。の。困。る。と。次。郎。は。身。の。こ。と。より。身。の。ま。ま。を。あ。ら。は。は。い
 失。ひ。さ。か。ら。ま。ま。き。ま。と。く。と。ま。り。多。爾。は。あ。れ。と。彼。困。道。の。穴。に。み。ご。り。お
 出入。と。難。し。と。ま。ま。足。より。南。の。方。に。常。く。出入。する。所。あり。こ。と。より。逃。れ。出
 多。入。奴。家。道。志。る。と。ま。ま。せ。ん。と。い。へ。小。太。郎。い。ま。ら。の。案。内。さ。へ。汝。を。も
 ば。え。ん。と。い。ふ。小。女。や。ま。ま。の。志。の。喜。し。と。れ。と。次。郎。去。日。の。病。を。負。て。こ。の

療治一すかきせんと同意ふ小賊甚しきぞと又一室うるや誘ひり。
 こゝに強盗の大軍とぞ傳へく。身丈七丈とるもおほ由大漢の顔色へ
 炭焼の翁れごとく。眼の大ききて明星の光るごとく。鼻高く頬髯髪おほ
 手行ゆる鬚の毛と極つるごとく。実繪の写る鬼おほしき。こゝに誘ひり
 錦の茵の上におあつらうき美貌女子と七八人左右を居し。及
 おハ小山のごとく大漢十四五人も居並び。案内する小賊とつらん。と
 大ねめきつる漢子お對ひ命おまほし醫師を誘ひまうか。と云へど。
 其漢子小き所とららん。不審げなるおひらして云へり。何ぞこれハ
 此山に強盗の棟梁おめて。此間次郎といふもの。汝ハ醫師といふ。何ぞ
 の地方け人ぞ小き郎恭しくこれとほし。其ハ此山の東なる林麓の者おて
 ちんはなり。棟梁は我ハおはし療治しやうか。せんとらん。次郎面
 りつら。我ハ此山に住と。旧くは彼所の麓ハ何人の人あり。這方
 の麓より再くの人ありといふ。能知りはら。し。醫師居ること。汝ハ
 汝を其上汝ハ辨とらん。武夫の物とらん。さ。び。獵夫とらん。の如く。と
 さらし。醫師めなること。は。欺ぞして。実るを。せり。些ぞも。偽る。あ。が。
 忽ち斬殺とて。一の。お。小を郎。と。ぞ。氣。こ。て。こ。お。ひ。お。
 かけぬ。疑ひ。と。お。の。凡て。茶。採。り。の。深。山。幽。谷。お。け。入。り。或ハ
 猛き。獸。の。出。遭。ひ。或ハ。山。氣。の。妖。物。は。遭。ふ。り。の。と。これ。除。く。も。さ。ら。ん。矢
 太刀。なる。どの。武器。め。の。こ。か。る。ひ。に。侍。て。ま。は。是。ホ。の。器。を。推。し。入。
 持。て。其。ハ。原。来。出。羽。の。國。仕。者。と。らん。此。地。方。醫。師。お。な。れ。よ。と。
 侍。く。は。主。業。の。も。近。比。此。山。の。東。なる。林。麓。は。後。り。侍。り。さ。ら。ん。こ。の。山
 不。審。内。めて。道。は。迷。ひ。て。こ。に。侍。り。は。お。の。と。よ。く。お。合。し。く。

療治一すかきせんと同意ふ小賊甚しきぞと又一室うるや誘ひり。
 こゝに強盗の大軍とぞ傳へく。身丈七丈とるもおほ由大漢の顔色へ
 炭焼の翁れごとく。眼の大ききて明星の光るごとく。鼻高く頬髯髪おほ
 手行ゆる鬚の毛と極つるごとく。実繪の写る鬼おほしき。こゝに誘ひり
 錦の茵の上におあつらうき美貌女子と七八人左右を居し。及
 おハ小山のごとく大漢十四五人も居並び。案内する小賊とつらん。と
 大ねめきつる漢子お對ひ命おまほし醫師を誘ひまうか。と云へど。
 其漢子小き所とららん。不審げなるおひらして云へり。何ぞこれハ
 此山に強盗の棟梁おめて。此間次郎といふもの。汝ハ醫師といふ。何ぞ
 の地方け人ぞ小き郎恭しくこれとほし。其ハ此山の東なる林麓の者おて
 ちんはなり。棟梁は我ハおはし療治しやうか。せんとらん。次郎面
 りつら。我ハ此山に住と。旧くは彼所の麓ハ何人の人あり。這方
 の麓より再くの人ありといふ。能知りはら。し。醫師居ること。汝ハ
 汝を其上汝ハ辨とらん。武夫の物とらん。さ。び。獵夫とらん。の如く。と
 さらし。醫師めなること。は。欺ぞして。実るを。せり。些ぞも。偽る。あ。が。
 忽ち斬殺とて。一の。お。小を郎。と。ぞ。氣。こ。て。こ。お。ひ。お。
 かけぬ。疑ひ。と。お。の。凡て。茶。採。り。の。深。山。幽。谷。お。け。入。り。或ハ
 猛き。獸。の。出。遭。ひ。或ハ。山。氣。の。妖。物。は。遭。ふ。り。の。と。これ。除。く。も。さ。ら。ん。矢
 太刀。なる。どの。武器。め。の。こ。か。る。ひ。に。侍。て。ま。は。是。ホ。の。器。を。推。し。入。
 持。て。其。ハ。原。来。出。羽。の。國。仕。者。と。らん。此。地。方。醫。師。お。な。れ。よ。と。
 侍。く。は。主。業。の。も。近。比。此。山。の。東。なる。林。麓。は。後。り。侍。り。さ。ら。ん。こ。の。山
 不。審。内。めて。道。は。迷。ひ。て。こ。に。侍。り。は。お。の。と。よ。く。お。合。し。く。



偽なりを察しぬ人と実し争ふ欺死なれば。次郎うち少く疑ひの
 解しや面を和らげ。さては再のけり。その鬼ナレ。我此疵を
 療治の方を云へ。と祖まて入る。ふ肩の辺より腕にかけて刀振りて
 斬きぬとおや。死疵あり。小を郎熟くとうちこて。ひひり。は。疵
 傷られ。その日。夜経。ぬ。とおほえ肉腐れ紅爛。此腐は肉を
 去。て。愈。ぐ。と。あ。う。れ。も。此。肉。は。去。ん。と。と。れ。其。痛。強。く。尋。を。の。人
 と。ほ。と。し。と。い。ふ。次。郎。欺。れ。ぬ。と。露。知。ら。ば。その。云。所。実。も。さ。の。り。ぬ
 ぶ。と。お。ひ。い。う。ぶ。こ。の。良。醫。師。さ。り。け。り。と。も。後。こ。ひ。汝。い。う。女。も。こ。う。此
 傷。と。愈。く。よ。と。ら。う。小。太。郎。は。う。と。喜。び。棟。梁。の。尋。常。の。人。も。あ
 り。後。よ。く。痛。を。忍。び。ぬ。の。人。が。頑。く。酒。を。吞。熟。酔。し。ぬ。ま。ら。う。治。療。を
 施。す。と。い。ふ。の。り。酒。を。吞。ん。と。大。杯。飲。み。け。り。續。け。吞。み。六。七
 盃。の。酒。を。吞。り。吐。耐。え。る。と。醉。し。ぬ。も。お。も。く。言。も。と。ど。ろ。く。お。人。自。在
 う。ら。ね。を。窺。ひ。白。布。を。と。ひ。瘡。傷。を。腕。と。巻。く。と。入。下。り。勿。心。ち。ま。り。手
 小。に。綁。め。り。手。下。の。盗。人。ホ。こ。れ。を。着。て。慌。忙。き。立。強。げ。む。小。太。郎
 声。を。高。き。う。ち。て。ま。り。け。り。我。系。す。良。醫。師。の。の。り。義。登。小。太。郎
 為。久。と。い。ふ。武。士。ま。り。今。日。此。山。に。狩。せ。し。は。獲。物。も。あ。ら。ざ。し。は
 手。を。空。き。し。て。還。ら。ん。と。さ。る。ふ。不。因。強。盗。の。巢。穴。を。吟。ひ。見。は。ま。し。と。
 床。後。の。代。ふ。此。棟。梁。を。生。捕。て。土。産。ま。る。所。を。若。さ。い。の。の。あ。ら。ば。
 手。此。次。郎。を。斬。殺。し。其。次。は。汝。も。殺。さ。し。又。神。妙。に。還。ら。し。な。ら。ば。
 汝。も。命。助。け。る。の。り。次。郎。が。奪。取。し。貯。け。は。金。銀。財。宝。多。く。あ。り。て。陣
 油。を。ま。ら。し。と。い。ふ。と。呼。ぶ。の。り。素。より。強。欲。鳥。合。の。盗。人。ホ。小。太。郎
 が。勇。威。を。懼。れ。ま。し。山。塞。の。財。宝。を。あ。ら。し。と。い。ふ。欲。お。も。く。敵。對。者

さらぬしなまぐ次郎を想ふりのめれど次郎お過失ぬんこと所
 憚りもどおきどさあもめて小太郎又云りうぬれ此山寨ふ居れ
 女子と渾我々像近れ良家の女見ゆ此亦搦とすて其身をさら
 かり父母兄弟は嘆れりん方はさむ彼本とも信ひ行く。その家お
 還るることぞれ妨せるといひけりも前刺毎案内志ける小太郎一々。
 山寨ふあるとゆふ女子と残りなく集足とも信ひ既し山寨を先と
 ありすれ。

此の段は... 小栗判官... 此の段は... 小栗判官... 此の段は... 小栗判官...

小栗判官傳卷之三終

